

会員の広場



夏目漱石と渋柿

谷本 勝（神奈川）

渋柿という地味な俳句結社に在籍して、すでに四半世紀が過ぎた。この結社と漱石との関わりを限られた範囲で紹介しておきたい。

俳句雑誌「渋柿」は大正四年二月に孤高の俳人松根東洋城により創刊された。渋柿の如きものには候へど「宮内省式部官であっ

た東洋城に対し、大正天皇から「俳句とはどんなものか」と問いかげがあり、献上したものである。創刊号の第一頁を飾っている。

以後この月刊誌は関東大震災や第二次大戦の空襲、物資不足にも耐えて、百年間一号も休むことなく発行を続け、この十月には一二三〇号に及んでいる。新傾向運動や写生主義が主流をなす時代に芭蕉直結、心境（境涯）俳句を唱え、同じホトトギスにいた夏目漱石を師系とした。この伝統は今も受け継がれ、表紙の渋柿という題字は漱石直筆である。

二人の出会いには、漱石が英語教師として松山中学に赴任した時である。その後漱石が五高に転じ、東洋城が一高に進学して俳句の通信添削が始まった。漱石が英国留学より帰る

と、東洋城は夏目家に入りびたりとなり、俳句、文学、人生の指導を受けたのである。

漱石の修善寺の大患はよく知られている。これは北白川宮に随行して修善寺に行くことになった東洋城が、漱石の胃病の予後に良かれと思ひ招待したのである。ところが、何回も吐血するなど、むしろ病状が悪化、漱石は菊屋旅館で二カ月間療養することになる。

東洋城は当然、鏡子夫人への連絡、医者の手配等に奔走、毎日のように見舞い、看病に務めた。東洋城にしてみれば、多くの門下生をさし置いて、恩師漱石をいわば独占できたことで、生涯最も幸せな時期であったという。漱石没後、渋柿社はいち早く漱石追悼号、一年後に漱石忌記念号をそれぞれ臨時増刊し

た。大正十一、二年にかけて、漱石高弟の三人（寺田寅彦、小宮豊隆、松根東洋城）が、月一回寄り集まり、漱石俳句を十句程度選び徹底的な議論を重ねた。それが毎月の渋柿誌に掲載され評判となる。大正十四年寺田寅彦が中心になって取りまとめ、「漱石俳句研究」として岩波書店より出版された。漱石俳句の研究書や解説書は極めて多いが、これはその原点にあり圧巻である。

渋柿という名前の由来は、一般的には大正天皇との対話として知られているが、正確ではない。かつて漱石の「能もなき渋柿共や門の内」という句に和して、東洋城が「能もなき渋柿共が誠かな」という句を作っていたことから「渋柿」に決まったといわれている。